

第4回第4次教育ビジョン策定委員会 議事要旨

日 時	令和5年11月27日（月） 15:00～16:00
場 所	県庁1階 ミナモホール
出席者	<p><委員> 8名 石田達也 委員、後藤栄一郎 委員、川島政樹 委員、北浦茂 委員、 長屋成博 委員、西川信廣 委員、益子典文 委員長、水川和彦 委員（50音順）</p> <p><県> 20名 教育長、副教育長、教育次長、義務教育総括監、教育総務課長 他</p>

会議の概要

◆ 協議事項

○第4次岐阜県振興基本計画（素案）の方向性について

※【○：委員】【→：事務局】

(1)「目指す人間像」について

- 「できた喜び」「できなかった悔しさ」「何かに熱中して取り組む」など、表現がすごく良いと思う。
- 教壇に立つ先生が「先生ほど楽しい仕事はない」と思うことが教員不足解消の一番の手だと考えるが、1行目の最初から「社会は大変だ」ということが書いてあることが気になる。「子どもには希望溢れる未来があり、学校等はその自分の未来を作る大切なところ」という希望ある書き出しから始まり、一方で、現状や社会の様々な課題があり、その解決のためにどのような力が必要か、という流れなのではないか。
- 目指す人間像の説明文の冒頭は、希望あふれる表現でスタートした方が読み手にとって入りやすいと思う。
- ふるさとには、バーチャルではなく生の声や真実があり、その真実を紡いでいる地域の人たちがいる。「かけがえのない真実の学びがあるから、ふるさとで学ぶ」というのが哲学であると思うので、そうしたニュアンスで書いてもらえると、県民が読んだとき、県はすごくいい教育を考えていると思ってもらえるのではないか。
- 最近は「協働」しづらくなっているのではないか。原因としてはコロナの影響ということもあるが、SNSの発達による影響もあると考える。
- 「ICTは動機付けしやすい面があるが、多用すると記憶や思考のプロセスが飛んでしまう面もあるため、メリット・デメリットを理解した上で活用を進めることが大切である」という意見に同感である。演劇で教えているのは、SNSを使って便利に行くのではなく、目の前の人間とどうするかである。相手と対話している時にアイデアが出るので、対話の機会を作り、いかに協働できるかが重要である。

- 岐阜で育てる、みんなで育てるということであれば、日本のため、世の中のためではなく、岐阜の未来のためにどう挑み続けるかということで、「岐阜」という言葉を入れていただきたい。
- 4つの力について。第3次計画でも力が示されていて、自己実現力であったが、創造力に変えた考え方は。
 - 第3次計画の「自己実現力」は、「自立力」・「共生力」を持った上で、自分をさらに高めていくという意味で定義されていたが、第4次計画では、自分の生き方だけではなく、社会の在り方まで含めて高めていけるような考え方をもち、行動していく子どもになってほしいという思いから言葉を検討し、「創造力」という言葉を充てた。
- 「自己実現力」は、自分の中で完結して高めていくという意味だが、「よりよい未来を築いていく」という意味では、他者との関係や社会貢献など、広い意味になっているので、より高く変えていただけたと理解した。

(2)施策について

①重点施策について

- 重点施策を3つに絞った背景は何か。
 - 施策の大柱を「知・徳・体」で整理しており、そのうちの「徳」を最初に掲げた。背景は、策定委員会における意見を踏まえ、コロナ禍を踏まえた対応である。
 - 豊かな人間性の育成で、コロナを踏まえて何が足りなかったかを考えると、一番は多様な人とのつながりや関わる力の向上、コミュニケーション能力の向上といった部分である。
 - また今後、多様な人と関わり、つながる力を養うための一つの手法としてふるさと教育はあると考える。探究的・主体的な学びや教科横断的な学びとして岐阜県ではふるさと教育に取り組んでいる。第3次計画においても重点施策にも取り上げてきたため、継続性も必要である。県においても象徴的な教育の1つである。
 - 「将来を見据えた魅力ある学校づくり」も、県教育委員会としてこれから取り組むべき大きな課題。将来的な中学卒業予定者数は、現状の1万8千人から、2038年には1万1千人となり、危機感を抱いている。そういった状況に対応するため、県立高校の在り方を検討するという課題認識がある。
- この3つを取り上げた理由をシンプルに示さなければ、趣旨や本位が外部には伝わりにくいのではないか。「命」や「一人一人に向き合った」「誰一人取り残さない」が今キーワードになっていて、それを担保する方向性や施策がI-1であることがもっと明確にされるべき。岐阜県の教育としてふるさと岐阜の教育を重点とするのであれば、もっとシンプルに打ち出されるべき。また、県で魅力的な学校づくりをするということについて、各校の魅力を上げていくこと以外にも、学校の統廃合を含め議論もスタートしていくべきであれば、どのような形で魅力ある学校づくりをしていくかが重要。
- 教育は、将来的に県の力（経済力・地域力・生活力など）に直結するところ。地域の外に出す人材のためではなく、県の力になっていく人材を育成する。「岐阜のため」というところも含めて重点的な施策を出すように見せていった方が良いのではないか。

②具体的な施策について

- 施策Ⅰ「『豊かな人間性』の育成について」。「自他のかけがえのない存在（いのち）を大切にするとともに、多様な人とつながり関わる力を育む」という部分については同感である。「いのちの教育」を推進していただき、市町村の教育長として、とても大切であると思って取り組んでいる。一方、具体的な施策の部分では「いのち」という言葉が消えて、「自他のかけがえのない存在（いのち）を大切にする」という部分が見えにくくなっている。命の部分についてももう少し説明する必要があると考える。例えば、「いじめ」の部分は、自分の命も相手の命も大切なので、命を守るということにつながるが、「命とは何か」「命を守ることとは」といったような、命に直結する施策が分かりづらいのはもったいない。
→ 意図としては各施策の中で具体的に取り組んでいくというところ。書き方を検討したい。
- いじめに関する施策指標「いじめの認知件数の内、学校の教職員が発見した割合（小学校・中学校・高等学校）」について、現況値は40.8%、目標値が60%以上となっている。現実的に60%にすることも大変なことは十分理解しているが、40%は先生が発見できなくても仕方がないといったようにも取れる。100%にすることはできることではないとわかっているが、数字の扱いは丁寧にしてもらった方がよい。
- 施策Ⅰの3「いじめ・不登校の未然防止と早期発見・早期対応の徹底」に書かれている文章はその通りであるが、具体的な表現が欲しい。登校の未然防止は最も重要で、1つの学校だけではなくて、県全体の公私の壁を取り払って、県全体で考えていくべき課題だと考えている。
- 施策Ⅰの4『「ふるさと岐阜」での活動を通して学ぶふるさと教育の推進』の取組の方向性の1つ目（「ふるさと岐阜」への更なる誇りと愛着を育むため、小・中学校では、岐阜県が世界に誇る自然・歴史・文化・産業等を体験して学ぶ取組を推進します。）について。施策指標に「岐阜県や自分の住んでいる地域の魅力を伝えることができる高校生の割合」の目標値は高校生80%となっている。小・中学生と高校生の発達段階によって感じ方が違うといえればそれまでだが、数値の出し方を精査すべきだと思う。高校生にとって「地域の魅力を伝えることができる」ということは、残すべき伝統や地域の持っている文化や良さを語れるとともに、地域課題がつかめることだというように、小・中・高におけるふるさと観が見えれば、計画の重みも増す。「魅力を伝えることができる高校生の割合」という表現で示すのは違うのではないか。
- 施策Ⅱの「複雑で変化がめまぐるしい社会の中で」という書き出しについて。「主体的に学ぶ中で、興味・関心を広げて、様々な課題と向き合っていくことが、複雑で変化がめまぐるしい社会の中でも自分らしい未来を切り開いていける」ということなのではないか。今の書きぶりでは「複雑で変化がめまぐるしい社会の中なので勉強しなければならない」と見えてしまう。子どもたちは、環境さえ整えば自ら学びを深めていける。
- 「高校在学中に海外留学する高校生の数」の目標値は900人となっているが、算出の根拠は。随分多い気がする。
→ 精査する。

- 施策Ⅳで部活動、スポーツ分野を全て網羅していることはどうなのか。また、体づくりの中で部活動について触れられていない。文化芸術について取り上げられていることは良い方向性だと考えるが、施策Ⅰ－１に文化芸術が取り上げられ、それ以降もⅠ－５の中にもあり、文化に力点を置いているところについて、これまでにそれほど議論されたか。
- 部活動の地域移行について、体力づくりを含めた部活動、部活動の延長線上にある競技力の向上をやっていくという部分が分からない。
- 文化芸術をスポーツ競技と並列することに違和感を覚える。また、スポーツについては、取組の方向性が記載されていない。並列に扱おうとしているのに、文化芸術のトップを支援・育成するということが触れられておらず、矛盾がある。
- 文化芸術に触れることは重要であるが、触れるには地域的な問題やお金等の問題も発生する。１０代の頃に質の高い音楽や演劇などの文化芸術に触れるチャンスが広がってほしい。
- 芸術に触れるということは、創造力が生まれたり、一緒に見た人が共感してつながるという横のつながりをつくったり、あるいは憧れが生まれる。文化芸術の充実という意味で、「積極的に触れる」という文言があっても良いと思う。